

### 山行報告

「学びあい」と書いてある登山及びハイキングは、文部科学省委託「学びあい、支えあい」地域活性化推進事業です。

#### 越上山(12月2日)「学びあい」

参加者 会員(障害者4名、健常者9名)  
会員外(健常者7名)

ら、お昼を食べ、Mさんは今回もお湯を沸かし、  
コーヒーを振る舞ってくださった。

吾野駅で全員合流し、車道を歩き始める。今日は、素晴らしい天気だ。今日は、年1回の清掃登山。みんなゴミを入れる袋を持って登り始める。

車道なのに後のグループはいろんなところに立ち寄り、超スローペース。これから少しペースを上げて欲しいところだ。

車道から登山道に入り、植林帯を登る。顔振峠まで近そうに見えて、なかなか着かない。樹林帯が切れ、2重の塔の下に出た。草原状になっていて展望が素晴らしい。一番右手に武甲山が見え、その右手、遠くに雲取山も見えていた。武甲山の手前には、伊豆ヶ岳が低くたたずんでいた。写真などを撮って、顔振峠に向かう。峠で車道と合流するが、トイレを済ませ、そのまま見晴台に向かう。少し早いが見晴台で昼食とする。遠くには、赤城山が見え、その左手には雪を抱いた谷川連峰が見えていた。麓の町は川越方面がよく見えていた。右手には、これから目指す越上山も見えていた。

親子が連れてきた犬たちと戯れたりしながら



越上山山頂に向けて登る

見晴台から来た道を引き返し、顔振峠から車道を歩く。越上山方面への道は、「チャレンジコース」になっていた。よく整備された道だが、越上山の山頂直下は、一部に厳しいところもあった。ここを慎重に通過し、山頂で記念写真を撮る。みんな、ホームページ用の顔をしてもらった。



越上山山頂にて

越上山の山頂から慎重に下り、稜線を歩き十二

曲がりを過ぎ、エビガ坂に到着。ここまで、何度もアップダウンがあり、さすがに疲れが見えてきた。エビガ坂から下り始めるが、日の短い秋のため、日没が気になり始める。それでも、十分明るいうちにユガテに到着。ユガテには、みかんやゆずが売られていて、みんな1袋100円のみかんなどを買っていた。

薄暗くなってきたものの、車道に出て、東吾

## 多峰主山(12月16日)「学びあい」

参加者 会員(障害者4名、健常者20名)

会員外(健常者9名)

今年の忘年山行は、快晴で迎えられた。ただ、少し風が強く、かなり寒い。

高麗駅で武蔵野線の電車遅れの影響を受けて遅れた人たちを待って出発する。車道に沿って緩やかに登っていく。今回は、全盲の方がHさんだけのため、立教大学の学生さんに交替でサポートしてもらう。振り返ると、日和田山方面の展望が広がっていた。

車道から登山道への入口を通り過ぎ、車道が行き止まりになっていたため、引き返して登山道を登り始める。この付近は、地図に書かれていない登山道がいくつもあって、少し迷うところだ。

多峰主山山頂直下の小さな岩場を登ると、山頂に飛び出す。ここは、素晴らしい展望の場所だ。二つのベンチが空いたので、そこを借りてうどんづくりにかかる。風が強いのではないかと心配したが、それほどでもなく、暖かな日差しを受けて、楽しくうどんを作って食べた。

野に向けて下る。国道に出た頃には、さすがに暗くなっていた。立教の先生、学生さん、そして参加されたみなさま、お疲れさまでした。

## コースタイム

吾野(9:50) ... 見晴台(11:45-12:40) ... 越上山(13:40-13:55) ... エビガ坂(15:30) ... ユガテ(15:50-16:00) ... 東吾野(16:50)



多峰主山山頂でのうどんづくり

山頂からは、富士山も見え、その右手に奥多摩の大岳山と御前山が見えていた。丹沢山塊や大山、そして東京都心の高層ビルも見えていた。集合写真を撮って、天覧山に向かう。山頂直下は、少し急な岩の階段なので、慎重にサポートをしてもらう。緩やかな尾根筋を歩き、のんびり歩いていたら、天覧山への登り口を見逃してしまった。後のグループから指摘があり、引き返して山頂に向かう。この登りは階段となっていて、意外と急だった。



天覧山山頂にて

天覧山の山頂も展望台となっていて、素晴らし

い展望が広がる。ここでもゆっくり休んで、岩場の上をとおり、さらに十六羅漢を過ぎて、トイレのある広場に出る。ここから少し歩いたところで、車道に出る。

飯能の駅で一次解散をして、忘年会の時間になるまで、コーヒータイトムなどをそれぞれで過ごし、17時から駅の近くの居酒屋で忘年会を

### しらびそ小屋(12月23日~24日)

参加者 会員(障害者1名、健常者9名)

会員外(健常者2名)

12月23日

今日の関東地方は雨の予報だったが、特急「風林火山」の車窓からは青空や太陽が顔を出してきた。甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山なども見え、期待が膨らむ。

松原湖駅で、Yさんと合流し、待っていてくださった稲子湯さんの送迎バスに乗車して、稲子湯に向かう。残念ながら八ヶ岳の山中は、まだ雲に包まれたままだった。稲子湯に着いても暖かく、足下の雪が溶けている。稲子湯からは、時々林道を横切りながら雪の山道を緩やかに登る。冬枯れのカラマツは、葉を落として寒そうだ。コマドリ沢に着いて、コーヒータイトムとする。温かなコーヒーに体が温まる。ここでアイゼンを付け、みどり池まで「はっても50分」というちょっとした急登を頑張る。急登が終わったところで、目の前にクイタダキが現れてくれた。なかなか近くで見ることのできない鳥なので、ラッキーだった。左手に硫黄岳の爆裂火口が見えたが、山頂は雲の中で見えなかった。

みどり池の畔のしらびそ小屋に到着し、受付を済ませて小屋に入る。夕食時間の17時半までクリスマス会(単なる飲み会ですが)で楽しんだ。

行い、今年の最多参加賞や新人賞、精勤賞などの表彰を行ったり、歌あり踊りありで、楽しい一時を過ごした。

### コースタイム

高麗駅(11:15)...多峰主山(12:10-13:30)...天覧山(14:10-14:45)...飯能駅(15:50)

12月24日

夜半には、風が出てきて、時折雪も吹き付けているようだった。しかし、明け方には風も収まり、静かな朝を迎えた。山々はガスに包まれていた。



みどり池に作られた雪だるまと一緒に

朝食後は、小屋を訪れるホンドリスや野鳥たちを見ようと、小屋の脇で待つことにする。ホンガラスが最初に現れ、全く逃げようともせず、2m位離れた位置で餌を啄んでいた。続いて、



リスたちが訪れるしらびそ小屋

お目当てのホンドリスやヒガラ、コガラ、ゴジュウカラなどが現れてくれた。特にリスは、か

わいしくさを何度も見せてくれた。

天狗岳を見ることはできなかったが、小屋でコーヒーなどを飲んでゆっくりし、9時過ぎに小屋を後にした。雪は固く締まって、アイゼンが小気味良く決まる。来た道を引き返し、陽光に包まれた稲子湯で、熱い温泉に入り、食堂でビールとうどんで空腹を満たし、松原湖駅まで

## 城山(1月13日)「学びあい」

参加者 会員(障害者4名、健常者6名)  
会員外(健常者5名)

今年最初の登山のため、快晴の空を期待していた。雨だった天気予報も晴れとなり、期待して小田急線に乗った。ところが、新松田付近では雨が降り出し、本降りとなっている。それでも、湯河原駅に着いた頃は、雨も止み、雲の切れ間に明るい空も見えていた。しかし、バスに乗って標高が上がるにつれ、霧の中となってしまった。



城山山頂にて

しとどの窟でバスを降り、雨具を付けて出発する。しとどの窟を見てもよと思ったが、コースから外れ、20分ほど歩くようなので、パスして城山に向かう。城山へは下りの道だった。しばらく下ってから、最後の登りをほんの少し頑張ると、城山の山頂に飛び出した。広く気持ちの良い山頂は、晴れていたら素晴らしい展望

送迎していただいた。小海線の車窓からは、南八ヶ岳の赤岳や横岳、権現岳などが、青空の下にくっきりと姿を見せていた。

## コースタイム

12/23 稲子湯(12:45)...しらびそ小屋(15:25)

12/24 しらびそ小屋(9:05)...稲子湯(10:50)

だろうなと想像をかき立ててくれる。しかし、今日は何も見えない。雨が降り出す心配もあるため、屋根のあるところでお汁粉を作ろうとしたが、下から登ってきた人が、ピクニックグラウンドにも屋根のある立派な建物があると教えてくれたので、そこまで行ってからお昼にすることにする。



冷えた身体にしみ渡ったお汁粉

立派な建物ではなかったが、お昼を食べながら、屋根の下で湯を沸かし、餅を煮てお汁粉を作って温まった。お汁粉なんて数年ぶりという方もいて、喜んでもらえた。

ここから山道を少し下ると、霧の晴れ間から伊豆半島や初島が見えるところがあった。登山道から車道となり、足への負担が増えてしまったが、道は急でぐんぐん下っている。鉄のグレーチングの上は、滑りやすく注意が必要だ。木から落ちたみかんは、すごい勢いで転がっていく。

駅の手前にあった成願寺に、樹齢800年のビャクシンという木があった。この巨木は文部科学省指定の天然記念物だそうだ。

鉄道の下をくぐって、右に曲がると、湯河原の駅だった。今年最初の山は、登山というより下山でした。

## 烏場山(1月20日)

参加者 会員(障害者1名、健常者6名)  
会員外(健常者3名)

晴れ間も見える薄曇りの空の下、和田浦駅から車道を歩く。珍しいものを展示してあるうな陣の前を過ぎ、鉄道を渡り、ポピーや菜の花の咲く畑を横に見て花嫁街道の入口に着く。かわいい道祖神が道端にたたずんでいた。



マテバシイの林を歩く

トイレを済ませ、花嫁街道を登っていく。最初だけやや急だが、あとは緩やかに登っていく。振り返ると海が見えていた。あまり展望は良くないという第一展望台は寄らずに見送り、第二展望台で休憩する。ここはなかなか展望がよい。展望台を過ぎると、マテバシイの林が始まる。白っぽい樹皮が独特の林相を作り出している。経文石を過ぎ、じがい水に着く。水場は見つからなかったが、これから向かう烏場山が、かなり遠くに見えていた。しかし、標高差は60m位しかなく、道も歩きやすいため、意外と早く近づいてくる。駒返しを過ぎ、見晴台でお昼とする。ここにはトイレもあるが、落ちると怖い、できれば避けたいトイレだった。

## コースタイム

しとどの窟(11:00)...城山(11:30-11:35)...ピクニックグラウンド(11:45-12:45)...湯河原駅(14:00)

今日は、気温は低いが、風もなく、時折日もさす穏やかな天候だ。今日も、Mさんからコーヒーを沸かしていただく。第三展望台は、すぐに着いた。遠くに伊予ヶ岳と思われる山が見えた。山頂がぴょこんと跳びだしていたので、間違いないと思うが、どうだろうか？ 少し離れたところに、富山と思われる山も見えた。少し登ると、山頂に到着した。山頂には、六つ星山の会のみなさんが休憩していた。今日は20数人の方が参加しているらしい。みなさんと話をしつつ、山頂での集合写真を撮る。



烏場山山頂にて

山頂からは、花婿コースを下る。この道は、全体的に急なところが多かった。旧烏場展望台を過ぎ、花婿コースの見晴台で休憩。さらに金比羅山を経て、黒滝に下る。滝の岩が黒いため、黒滝と言うのだろうか？ 水量は少なかった。ここから、沢沿いに歩き、はなその広場に上がる。ここから車道を、花嫁街道入口まで歩き、あとは来た時と同じ道を和田浦駅まで歩いた。駅が近づくころ、ちらちらと小雪が舞い始めてきた。南房総の日だまりハイクを楽しめた一日でした。

## コースタイム

和田浦駅(9:55)...花嫁街道入口(10:30-10:35)  
...経文石(11:40)...見晴台(12:25-13:00)...鳥

場山(13:10-13:15) ... 旧鳥場展望台  
(13:35-13:45)...金比羅山(14:35)...和田浦駅  
(15:45)

## 湯の丸高原(1月26日~27日)「学びあい」

参加者 会員(障害者7名、健常者15名)  
賛助員(健常者1名)

プ場を経て、つつじ平を目指す。しかし、トレースはつつじ平より少し上の富士山が見えるところに上がっていた。八ヶ岳は蓼科山から赤岳まで見えている。その左に富士山が見える。

1月26日

高速バスの車窓から西上州の山々や浅間山を見て楽しんでいるうちに、小諸駅に到着。ここからタクシーでロッジまで運んでもらう。今日は北アルプスも見える良い天気だ。

ロッジに荷物を置かせていただき、池ノ平方面の林道を歩いてみる。スノーシューを履いているので、林道から外れて登山道も歩く。途中で先頭がAさんからSさんに代わった。さすが若さでぐんぐん登っていく。15時になったので、引き返すことにしたが、まだ物足りないようだった。

スキー場の脇に急な斜面があり、そこを登りはじめた人がいたため、そこでシリセードの練習を始めた。5mくらいの斜面だが、雪が固くしまっているため、すごい勢いで滑り降りていた。

ロッジに戻って、温泉に入りにいき、夜は歌あり踊りありの楽しい懇親会で更けていった。

1月27日

夜半に小雪がちらついたが、朝は眩しい輝きに包まれていた。ゆっくり朝食をいただき、出発は9時を少し回っていた。今日は、湯ノ丸山の山頂を目指す。山に登らない4人の人たちと別れ、19人で登山に出発する。

いつもの通りスキー場脇の林道からキャン



湯ノ丸山山頂を目指す

スノーシューを利かせて順調に登る。登るにつれて樹氷が美しくなる。後の籠ノ登山はスツキリと見え、北には四阿山が見えていた。登るにつれて浅間山も見えるようになった。噴煙がたくさん上がっていた。



19人で登頂した湯ノ丸山山頂にて

山頂直下はアイゼンがいたと思ったが、下ってきた人に聞いたら、雪は固くなくスノーシューのままで大丈夫とのこと。途中で引き返すつもりだと言った方もそのまま登り、全員が山頂に登り着いた。冬の湯ノ丸山に19人全員が登頂できたことは、とてもうれしいことです。北アルプスは見えませんでしたでしたが、四阿山の隣の根

子岳や西の烏帽子岳がよく見えていました。記念写真を撮って、下山にかかります。

真っ青な空の下を、快適に下る人、ちょっと腰が引けて下る人、いろんな方がいましたが、途中からシリセードをはじめました。童心に戻って、みんな歓声を上げながら滑っていました。

帰りはつつじ平におり、尾根通しに歩き、スキー場の脇を通って下ることにしました。尾根からは、登ってきた湯ノ丸山がよく見え、みんな「あんなところを登ってきたんだ」と感慨に浸っていました。

### 南高尾山稜(2月17日)「学びあい」

参加者 会員(障害者3名、健常者13名)  
会員外(障害者2名、健常者2名)

朝、5時過ぎに家を出ると、目の前にサンリ座がくっきりと見えていた。今日は素晴らしい天気になりそうだ。

相模湖駅で全員集合し、バスで大垂水峠まで行く。バス停の脇から雲をなびかせた富士山がよく見えた。



大垂水峠から見た富士山

車道から登山道の階段に入ると、すぐに凍り付いた雪道となる。道路を渡る橋の上で、軽アイゼンや滑り止めを付ける。トラバース道は、滑りやすく、軽アイゼンが良く利いた。尾根に出

ロッジに戻り、昼食をいただき、楽しい思い出をザックに詰めてタクシーに乗り込みます。まばゆいばかりの光の中を、タクシーは下っていきました。

### コースタイム

1/26 ロッジから林道付近散策(14:00頃～16:00)

1/27 ロッジ(9:05)...湯ノ丸山(11:30-11:40)...ロッジ(13:15)

ると、雪も溶けて、地面が出ている。雪や地面が交互に現れる道を登っていく。木々の間からは、丹沢の山々や富士山が見えていた。



大洞山山頂にて

大洞山の手前のベンチのあるところで、緩んだアイゼンを直してもらおう。ここから100mで大洞山だ。ここで、記念写真を撮影し、縦走路に行く。山頂からの下りは、かなり傾斜がきつかった。中沢山方面から来た人に雪の状態を聞いてみたら、ほとんどアイゼンはいらぬ状況だということなので、アイゼンを付けていたい人を除いて、アイゼンを外す。稜線通しに忠実にたどり、中沢山は巻いていくと、テーブルとベンチがあったので、そこで昼食にする。先程まで木の間から降り注いでいた日差しは雲に隠れてしまい、とても寒くなってしまった。最年少のK君が「帰りたい」と言うので、出発することにする。

しかし、ここでコースを間違ってしまったようだ。しっかりした道が付いていたが、津久井湖が左手に見えたり、尾根の右側に雪が付いている北側斜面になっていることが、明らかにおかしいはずなので、ここで気づくことができたはずだが、そのまま下っていくと、麓の町が近づき、どんどん下っている。少し戻って正しい道を探してもらったが、見つからなかったのので、そのまま下ることにする。この段階で、津久井湖方面に下っていることと、この道が送電線鉄塔の巡視路のようで、ある程度しっかり道が付いていることから判断した。道は沢沿いとなり、細いところもあったが、最後に崩れかけ

た梯子を下ると、林道に出た。ここは、沼本ダムノボダムの北側だった。

この道は土砂崩れが激しく、立ち入り禁止の場所で、こちら側にこないように鉄パイプの格子が設置されていた。そこをくぐり抜け、車道を下っていく。バス路線に出て、教えていただいたバス停からバスに乗り、相模湖駅に戻った。

### コースタイム

大垂水峠(9:15)...大洞山(10:25-10:40)...中沢山下(11:25-11:55)...林道(13:05-13:30)...バス停(14:20)

## 三ノ木戸山(2月24日)強風などのため山を変更

参加者 会員(障害者4名、健常者9名)  
会員外(健常者1名)

昨日の春一番は、激しい強風と砂埃を巻き上げて去っていったが、太平洋に出た低気圧はさらに発達して、今日も激しい強風が吹いている。

奥多摩駅のタクシー会社は、予約をさせてもらえない。駅でしばらく待ったが、タクシーが来そうにないので、駅から直接登れる石尾根經由六ツ石山を目指すことに変更して出発する。



春の日差しを浴びたフクジュソウ

車道から山道になり、階段を上がってまた車道に出たところで、Sさんがフクジュソウを発見。眩しい太陽を浴びて、花弁が金色に輝いている。

周囲より10mも高い花卉の中で、温められた虫たちは、元気になって花から花へと飛び回るそう。つややかな花は、まさに金杯だ。

山道となるが、軽アイゼンはまだ付けずに、登っていく。上空でゴォーと強風がうなりをあげている。それを聞きながら、凍って滑りやすい所も、そのまま登り、尾根の上に飛び出す。ここで一気に強風の洗礼を受ける。雪も増えてきたため、軽アイゼンを装着する。

固く締まった雪の道を、アイゼンを利かせて登っていく。右手には本仁田山がよく見える。とにかく風が強く冷たい。風を避けられるえぐれた登山道で昼食とする。AさんとTさんの目出帽はパールックだ。

ここから少し登ると、雪の溶けた南側斜面に行くようになる。この付近は、二重山稜となっている。左手は北側になるため真っ白だが、南側は落ち葉が積もってかさこそと踏みしめる音が心地よい。南側と北側の違いが大きく、おもしろい。

暖かな日だまりの所で、Tさんは待っているという。目標の六ツ石山は無理なので、今日は目の前の三ノ木戸山までとして、登ることにする。北側斜面をトラバースする夏道を見送り、

直接尾根上を歩いて三ノ木戸山に登る。右手には最初の目標とした六ツ石山が見えていた。



三ノ木戸山の山頂からは、御前山、三頭山、大岳山などが南側に見え、北側には本仁田山、川苔山、そして長沢背稜の山々が見えた。記念

写真を撮って、Tさんが待つ所の下る。ここからは順調に下る。ヤマガラやヒガラが囀っていた。

奥多摩駅に着き、解散した後、駅の2階にある食堂でくつろぐことにする。食堂の方が、今日の風は、今までに経験したことがないほど強い風だと言っていた。誰にも登山者に会わない静かな山行を終えて、電車を待つまでの時間をくつろいだ。

#### コースタイム

奥多摩駅(9:50) ... 標高 900m 付近  
(12:00-12:25) ... 三ノ木戸山(13:20-13:30) ...  
奥多摩駅(15:50)

リーダー養成コースの赤岳は参加者不在により中止させていただきました。

## 立教大学生のレポートから

### 闇の中で山を感じるという奇跡をかじって

私は、高校から本格的に山に登り始めた。南アルプスや北アルプスの縦走、今年の夏には北海道にてトムラウシ山から大雪山への縦走、さらに利尻岳への単独山行など、何かと山には登ってきている。しかし、今回のアルプスでの山行は、今までの自分の感じてきた山とはまったく違う山を体験させてくれるものであった。

まず、第一に視覚障害者の方と山に登るという体験である。今回の山行では、私のグループにはHさんという全盲の会員の方がいらした。会のメンバーの方々は、皆「Hさんは、山の歩き方が本当にうまい。Hさんのサポートは、とてもいい体験になる。」と言っておられた。

私も実際にHさんのサポートをさせていただいた。麓のバス亭付近から始まる紅葉台までの登り道である。なるほど、Hさんは私のザッ

クにつけられたサポート用のロープを握ってはいるが、あくまで握っているだけなのである。決してそのロープに引っ張られて進むというわけではないのだ。それは、地面のくぼみを歩くときも、階段を登るときでもある。自分の足の裏と、右手に握られたストックの感覚で山を歩いているのだ。おそらく、以前、Kさんも言っておられた「皮膚感覚」という視覚を失うことで目覚めた感覚をも駆使して、山に対してからだ全体で向き合っているという印象を受けた。これは、私自身がサポートされる側に立つことでより一層強く感じられることになる。

第二の人生初体験は、上記の「私自身がサポートされる側に立つ」ということである。目的地である足和田山に到着し、残すは下山のみとなったとき、私は、何かこの場所とこの時間でしか体験できないものはないかと考えた。導き

だした答えは、自分も光を閉ざして、闇の中で山を感じるというものだった。会のメンバーの方にサポートをお願いし、眼鏡に黒い手袋を挟んで視界を塞いで山を下りた。なんという恐怖。なんという緊張。自分の前に何があるのか、サイドはどうなっているのか、どれくらいの距離を歩いたのか。情報がまったく頭に入ってこない。腰がひける、足が前に伸びない、からだ全体に必要な以上に力が入ると同時に背中が汗ばみだす。階段で滑り、石に足を取られ、最後にはルートから足を踏み外し、完全にしりもちをついた。時間にすると約30分の体験であったが、とても長く感じられた。そこには確実にクロノス時間ではなく、カイロス時間、つまり物理法則によらない人間主観の時間が流れていたと思う。

そして、もう一つ。山をゆっくりと味わいながら登るというアルプの会のスタイルも私にとってはとても新鮮であった。今までの私の山の登り方というのは、典型的な、若さにまかせたゴリ押し型の登り方であったと思う。どうしてもマップタイムに刺激されて、スピードばか

り追い求めていた(トレーニングを兼ねていたからでもあるが)。だが、ゆっくり歩き、草を見て立ち止まり、花を見て立ち止まり、小動物の気配に立ち止まるというのも、様々な発見があってもおもしろい。そのような登り方を今までもしてきたのだろう、会のメンバーは皆、草花や木について詳しい。山の楽しみ方は、山に入る人の数だけ存在すると思う。今回、アルプ流の山の楽しみ方を味わうことができたのもとてもいい経験になると思う。

当然、初めての体験が多かったので、歩くことに必死で、外界の音や感触を味わう余裕は正直あまりなかった。しかし、この山行での新たな体験は、私にとって山というフィールドの新たな可能性を見出してくれたような気がする。会のメンバーは、障害のある人も、ない人も支えあいながら本当に楽しそうに山を登っていた。山は「人生」にたとえられることがよくあるが、その点でもウェルネスの見地から登山の持つ有用性が確認できるし、私の意識の中ではますます実証されていくのである。

S . F

## 鐘ヶ岳登山を通して学んだこと

11月18日、日曜日。今日はここのところ1番の秋晴れで厚木についたころには太陽の光がまぶしく、高地で気温は低いのに、着ていた上着を脱いで、半袖になる人がいるほど、あたたかく、まさに登山日和な日であった。いつも生活している騒がしい町の空気とは違い、はっきりとわかるほど、空気は澄み切っていて、これこそ、おいしい空気、もう何年も味わっていなかったこの空気を実感することができた。一緒に登ったAさんをはじめ、アルプ山の会の人々は生き生き、はつらつとしていて、まったく年齢を感じさせないほど元気で心も体も若い人たちだった。私が登りの道中、土に足をとられたり、階段を登る度、息をあげていたのに、

皆さんは大きな声で楽しそうにおしゃべりをしたり、声をかけてくれたり、とても頼もしかった。どこからそんな元気がくるのだろうとも疑問に思ったが、小さなどんぐりやまだ紅葉しきっていない木を見ては微笑む姿に、この自然が元気の源であることが感じられた。

全盲のAさんのサポートをするとき、はじめはこんな大役を自分がやって本当に大丈夫だろうか、ただでさえこんな足場の悪い場所で、Aさんを危険な目にあわせることなく、無事導けるだろうか不安だった。Aさんが頼りに私のリュックからのびる、たった1本の紐だ。この紐がAさんの命綱のようであった。しかし、目が見えていないのはもしかして嘘なのかな？

と思うほど、彼女はすらすらと危険な山道を危なげなく歩いている。でこぼこみち、つまづきそうな階段も立ち止まることなく歩いていた。そんな道中、彼女は『Mちゃんのトレーナーの色は何色？靴は何色？髪の毛の色は？』と私を質問責めにしてきた。その時、私のような健常者がAさんのような全盲の方にはできることは、彼女の目になることだと気づいた。私は、イメージがふくらむように、できるだけ細かく伝えた。『Mちゃんは声も名前もかわいいね、女優さんだね』と言われると、嬉しいがくすぐったい気持ちになってしまった。きっと、Aさんの頭の中には本物より遥かにかわいく美化されたMが映っているにちがいない。そんなにせ女優・MはAさんの目になれるよう、カメムシのメタリックな色。おじぞうさんの顔など細かく伝えた。普段、私は人と話すとき、相手がわか

ってくれているというどこか以心伝心のような意識があるからだろうか、きちんと伝えることの難しさを思い知った。この花がどのように綺麗か、このおじぞうさんの顔はどんな表情か、その思いはちゃんと伝わっただろうか。

今回の登山で感じたことは人の能力の無限の可能性と、介助において、なんでも手伝おうとするのではなく、その人ができることを考え、その人が何を必要としているか、そのかけたところを補うのが大切だと感じた。

そして、二日目に筋肉痛がきたこと、若いのにこんな運動不足なんて情けない。次回の12月の登山に向けて、毎日ウォーキングをして体力づくりをしようと試みた、自然から自分の体力まで、そんな色々なことを教えてくれた登山であった。 M . W

## 越上山登山

12月2日、埼玉県の越上山の登山に参加させて頂いた。今回の登山は2回目だったので前回に比べて落ち着いて登山に参加できた。前回の山は山梨県だったので高速バスで長い時間をかけていったけれど、越上山は西武池袋線で吾野駅まで一本で1時間程度だったので楽に目的地に着けた。参加者の方は知っている方も多く、名前も覚えていてくれる方もいたので初めからリラックスできて取り組めた。今回の登山はただ山を登るだけでなく清掃しながらの登山だった。2班に別れ、私は1班になった。1班には2人の盲の方がいてIさんはとても寒い日だったのに半袖でみんな驚いていた。

まず顔振峠を目指した。顔振峠とは昔、義経と弁慶がこの峠を越えた時にあまりにも綺麗な景色だったので何度も振り返ったのが由来だとMさんに教えていただいた。ちょうど紅葉が綺麗な季節だったのでみんなで歓声をあげながら登山した。前回も思ったことだがMさん

のサポートをして、全然力を入れずに私の鞆をおさえていることに再び驚いた。話を聞くと、少しでも上下したり左右に動いたり、岩を登っていることまで分かるのだそう。歩いていると、私たちが気づかない程の小さな声で小鳥が鳴いていてもすぐ分かっていた。健常者が目に頼っているぶん、見ることに意外にとっても敏感でいるのだと分かり驚いた。Mさんはもとは目が見えていたのだが少しずつ見えなくなり視覚を失ったのだそう。けれどアルプの会に入って山に登ることで楽しみが増えたらしい。

見晴台に着いてお昼を食べた。天気もよかったので遠くまでよく見え素晴らしい眺めだった。お弁当を忘れた私にみんなお弁当を分けてくれた。本当にやさしい方ばかり。

そして越上山を目指した。頂上付近は足場がとても悪く、サポートしながら歩くのはすごく神経を使い、どうすれば歩きやすいように伝えるかが一番大変で、一人で登る何倍も疲れてし

まった。最後の岩場は本当に難しくサポートはできなかった。山頂で記念写真を撮って下山した。それから何度も登ったり下ったりの繰り返しでみんなとてもつかれてしまったが無事、東吾野駅まで到着した。

2回のアルプの会の登山に参加して、いままで知らなかった体験をすることができた。盲の方とあまり話したこともなかったので身近のことに感じられるようになり、ほんの少しだけ

れど気持ちが分かったような気がした。こういうアルプの会のような活動は障害者の方にとって世間との繋がりにもなるし、楽しみの一つにもなる大切な活動だと感じた。私は他にこういう活動があるのかあまり知らないが、知らないことを教えあえるということは、私達にとっても必要なことであると思うのでもっとこのような活動が増えればいいと思った。

A . I

### 越上山に参加をして・・・

12月2日の越上山清掃登山に参加させていただきました。天気は快晴で、登山を行うのに最高日和でした。今回は二回目の参加ということで、以前に参加した足和田山のとくと同じアルプの方達が結構いらっしゃったので、安心して参加することができました。

吾野駅 見晴台 越上山 エピカ坂 ユガテ

東吾野駅というコースでゴミ拾いをしながら登山をしました。最初、Mさんという女性の方の補助をしました。Mさんの学生時代のお話や様々なお話をし、とても楽しく歩きました。顔振峠に向かう途中、二重の塔があるところで最初の休憩をとりました。紅葉が見頃で、眺めが最高でした。そして見晴台で昼食をとりました。そこからの眺めは休憩のときの眺めとは違う最高の眺めで、そこからは遠くに赤城山がみえました。顔振峠は、義経が絶景のあまり何度も振り返りながら登ったという説があるように、展望抜群で義経が何度も振り返る気持ちが分かる気がしました。

越上山に登り、山頂をめざしていましたが、なかなか着かず、チャレンジコースとなっているとおり、山頂に近づくにつれて岩場で少し危険なところがありました。滑りやすく、恐ろしいと感じる場所もありました。しかし全盲の方がそのような危険なところを着実に登っていたので驚きました。山頂に着くと、山林などで展

望がほとんどなかったのが残念でした。しかし山頂に着くと達成感で気持ち良かったです。下る途中は上がり下がり激しかったのですが、話しをしながらだったからかあっという間に下ることができました。ユガテでは、のどかな山林風景が広がっていて、懐かしい日本風景をみることができました。車道にでてから前回の登山でも一緒だった盲目のAさんの補助をし、勉強になるお話をさせていただきました。なによりAさんの明るさに元気をもらいました。東吾野駅に着く頃には真っ暗でした。約7時間の登山でしたが終わってしまうとあっという間でした。自然にふれあうということは普段あまりできないので、新鮮でとても気持ちよい達成感を味わうことができました。なによりアルプの人たちが温かく、色々な話をし、新しい考えや様々なことを学ぶことができたように思います。それから元気と勇気をもらいました。アルプでは障がい者と健常者わけ隔たりなく接していました。健常者の人たちはボランティアをしているというより障がい者、健常者、関係なく共に楽しんでいたように思いました。最初私は盲目の方の補助をする時に怪我をしないようにと思い、緊張していましたが、一緒に山登りを楽しむということが大切であると気づきました。もし困った時にお互いが助け合えばいいのだと思います。

今回このような経験ができてとてもよかったです。2回の登山を通じて様々なことを学ぶことができました。そしてもっと自然を好きになりました。これからも様々な自然に触れていきたいと思います。自然は人の心を豊かにし、私

たちに様々なことを教えてくれるように思います。登山はとても楽しい経験ができました。そして最後に、アルプのみなさんで出会えたということが一番の財産です。 K . O

## 生涯スポーツのもつ力 ～ 目的・目標・仲間～

「山に登る」というシンプルなスポーツはなぜ世界中の人々に愛好されているのであろうか。私も高校時代より登山を始めて6年目になる。自分で登っていて不思議なのであるが、山というのは登っている最中はなかなか辛いものだ。しかし、山頂に到着し、下山して帰路に着くとなぜか「次はどこに登ろうか。」と考えている。だが、私はこのゼミで障害者の方々や様々な年齢層の方々と山に登り、そして交流する上で、この、山へのリピートが生涯スポーツの特性に依拠する可能性を非常に強く感じたのである。

今回の山行がアルプでの2回目の活動になる。場所は埼玉県の飯能である。天気も良好で、忘年山行だけあって前回よりも多くの会員の方々が集まっていた。今回は視覚障害をもつ参加者はHさんお一人であったので立教から参加の学生8人が常に交代でサポートをするという形になった。山の難易度は登山というよりはハイキングそのものであったので、私はむしろ下山の後に行われる忘年会での人間模様に関心を寄せていたと言えるだろう。よって、以降、忘年会に参加することで私が感じたことを特筆したいと思う。

忘年会には視覚障害をもつHさんをはじめ、様々な年代、職種の方々が参加していたが、驚いたのはそのあまりのテンションの高さである。酒を酌み交わし、笑い、歌う。学生の立場から見てもそれはかなりパワフルなものであった。本当にすごい元気があるのだ。年齢をま

ったく感じさせないと言っていいと思う。私はこのエネルギーが登山というスポーツを通して培われた仲間意識と日常生活からの精神の開放によってもたらされたものだと考える。スポーツは身体を健康を保つだけでなく精神活動にも大きな影響を与える。例えば、現役を引退した人間が、社会参加の場をなくしたことで生活が墮落したり、萎縮してしまったという例は枚挙に暇がない。だからこそ生涯スポーツや様々なカルチャースクールの有効性が叫ばれているのだろう。

登山というスポーツはまさにこの生涯スポーツに非常によく適合したものだとは私は思う。まず、登山とは本来、他者と何かを争うというものではない。相手は自然であり自分でしかない。そこには強制は無く、存在するのはあくまでも個人の自主性と情熱だ。「競う」という原理は大切なものではあるが、時に人を苦しめる。だからこそ生涯スポーツにおいてその目的、目標はあくまでも個人に内在するものである必要があるのではないかと思う。そしてそれを満たしてくれるのが登山なのだ。

前述したように私も山に登り始めて6年目になる。私は山が好きだ。自分を解放できるし、自分の体力や精神力を純粹に判断し、高めることができると思っている。アルプの方々との出会いは、それが生涯にわたって実行できることと、人と人との関係の大切さを再認識させてくれるものだったと思う。また、障害をもっても山に登り続ける方の姿勢や技術を実際に見て、ウ

エルネスというものに基準や限界はなく、挑戦し楽しむ姿勢こそが生き方をより豊かにしてくれるということにも気づけたように思う。そ

して、今後も私はこの経験を踏んで山に登り続けたい。  
S . F

## 多峯主山登山を通して学んだこと

『11月にもご一緒した学生さんですよ？』そのひとことにおろおろして固まっていた私の緊張が一瞬にして溶けた。集合場所の池袋南口でまだゼミ仲間も来ていなく、心細くて、勇気を出して会員の方に話しかけようか迷っていたときに、ふと、隣にいた方が微笑んで話しかけてきてくれた。落ち着きのない私に気づいたのだろうか、覚えててくれていたという安心感となぜだかなつかしい場所に帰ってきたような感覚がした。向かいでAさんがこちらをみてぺこりとおじぎをしてくれた。“ここにも、私の居場所があるんだ”と人を受け入れてくれるあたたかさを感じた。それだけでも、本当このゼミに入ってよかったなと思った。

今日登る山は多峰主山、飯能市にある標高271メートルと比較的低く、ハイキングとして有名なコースであった。飯能市から住宅街を抜けてすぐ山道に入り1時間足らずで山頂に着いた。お年寄りからカップル、親子連れともすれ違い、そのたびあいさつをするのが、とても心地よかった。都会で他人とすれ違うとき、特に朝の駅の殺伐とした空気とはまったく違い、穏やかでやわらかい空気がそこにあった。ここにも、相手を仲間として受け入れるあたたかさを感じた。自然がそうさせてくれるのであろうか。やはり、人間と自然は切り離せないのだろう。

前回、11月の鐘ヶ岳でもサポートした視覚障害のあるHさんのお手伝いを今回もさせていただいた。Hさんは登山のベテランで、雰囲気のある方でそしてトレندیードラマの主演のような聞いていてうっとりする声の持ち主であった。『そんな気を使わなくていいわよ』

と言って下さったのは笑顔の素敵なHさんの奥さんであった。奥さんの笑顔のかわいさはびっくりな言葉が見つからないほど人の心を優しくさせる印象的な笑顔だった。夫のHさんのサポート私たち学生に任せて、後ろからずっと見ていて下さった奥さん。きっと奥さんのこの笑顔の裏にはたくさんの困難を乗り越えてきた過去があるのだろうと感じた。視覚障害を持ったHさん自身ももちろん私には想像もつかないほど大変である。しかし、障害を持つ人の周りの人も、同じ位苦労を重ねているだろう。ここに来るまで、至るまでどのようなことがあったのだろう。伝わらないもどかしさや、社会への不満、支えて生きていくことの難しさ、きっとたくさんの衝突があっただろう。私の想像力と知識ではまだまだ足りない。が、それを二人で切り抜けてきたからこそ、奥さんの人をひきつける笑顔も、Hさんの安心を人に与える声も、存在するのだろうと感じた。自分に置き換えてみた。もし、自分の夫が視覚障害であつたら、家から出したくない、できれば安全な家にいてほしい、ましてや危険な登山なんて何があるかわからない、といって相手の意見も聞かず夫の自由を奪い、夫婦で閉じこもってしまうかもしれない。Hさん夫妻をみて、お互いの長い年月をかけて作り上げた強い絆と経験、障害を乗り越えた、もしくは障害あってこそその深い夫婦愛を強く感じた。登山を始めたころには暑くて上着を脱ぐほどだったが、下山するころにはすっかり、気温も下がり、日中にかいた汗がひんやりとして寒く、まだ冬まっさい中であることを思い出させた。前に行くHさん夫妻が手を取り合っている姿は、私の心を優しくさせた。

いろいろな愛の形がある。愛するということはそれだけで素晴らしい。愛とは決して一方的ではない。因果応報、ソウル名と、先生の授業で習った言葉が浮かんだ。ここで出会ったすべての人々との出会いがかけがえのない縁であり、

大切にしたい。きっと、私はまた春にAさんにメールをするだろう。人々と、自然から元気をもたらすために。そんなことを帰りの電車で揺られながら私は考えていた。 M . W

## 中山峠の登山レポート

私は12月23日～24日の長野県にある八ヶ岳付近の中山峠に行ってきました。当日は、JR 新宿駅に集合することになっていました。定員が15名であり1泊2日ということで、やはりフィールドスタディーの学生は参加していませんでした。しかし先日の多峰主山に参加されていたHさんという方も一緒だったので安心しました。そして集合時間になり12名で出発しました。まず新宿駅から特急あずさ3号に乗り小淵沢駅で降り、そこで乗り換えて松原湖駅でおりました。しかしその間私は天候のことを非常に心配していました。なぜなら、当日の朝の天気は雨でかなり降っていたからです。松原湖からは稲子湯というお風呂屋さんから送迎バスがでていて、それで稲子湯まで送っていただきました。東京では天気が悪かったのですが、ここに到着してみると快晴だったので、今までの不安が消えました。そしてここからいざ登山となるのですが、私が購入した登山靴は冬山に使用するには少し危険ということでHさんに冬用の重登山靴を貸していただきました。最初のほうは一般道を横断しながら山道を登るという感じでした。また今回は平年に比べて気温が暖かく0もありました。平年は-15くらいということでしたので、段違いの暖かさでした。そのこともあってか登山中にかなり汗もかいて暑くなってきたので、私を含めて何人かは上着を脱いで登っていきました。予定では3時間程で山小屋に到着するということ

でしたが、天気も変わることなく晴れていたの少し開けたところで休憩を30分とることになりました。その看板には「這っても30分」という面白いことが書いてあり、かなり近いということがわかり安心しました。しかし、最後の道はこれまで登ってきたところより険しいので安全のためにアイゼンを付けて登るということでした。アイゼンを付けると急な段差でもすべることなく氷にがっちり杭がささるので簡単に登ることができました。そしてついに小屋に着きました。その小屋はしらびそ小屋といって木造の趣のあるものでした。そこに着いたのがまだ16時30分で夕食が17時30分ということもあったので、談話室ですごしました。そして夕食は、今日の山登りの疲れもあってか非常においしかったです。消灯が21時だったので少し早いですが寝床につきました。朝になって窓の外を見てみると、かなり雪が積もっていました。夜に降ったもので、もう止んでいたのよかったです。そして朝食を食べ終え、下山の時間になりました。当たり前ですが登りに比べると足や肩の負担はまったくなく、簡単に下まで降りていけました。また出発地点の稲子湯まで戻ってきて、温泉にはいりました。1日の疲れがとれたようでした。そしてここで昼食をとった後、帰りました。帰りも晴れていて、電車からは赤岳や富士山を見ることができました。今回もまた貴重な経験をさせていただきました。 S . N

## その他事業報告

### 第4回千葉市民活動センターまつり参加(2月2日～3日)

参加者 会員(健常者7名)  
賛助員(健常者1名)

第4回目となる千葉市民活動センターまつりだが、今年はじめて参加させていただいた。

山仲間アルプの紹介や山の写真展示、アルバムの閲覧、ノートパソコンでのビデオやスライドショーの映像紹介、パンフレットや登山・ハイキング計画のチラシ配布などを行った。遠く埼玉県からも応援に駆けつけてくださった会員の方もいて、みなさまに大変お世話になりました。

2日目は、大雪になりましたが、ビデオ映像とスライドショーを多くの方に見ていただきました。また、ステージでは、ミューズ-ファ

ン アソシエイツさんの「うれしいフォークソングをみんなで歌おう」やザ・パッパーズさんの「うたっていい友 2008」などなど、楽しい催しが開催されていました。



山仲間アルプのブースにて

今回の参加で、山仲間アルプの活動が、少しでも多くの方にご理解いただけたと思います。スタッフのみなさま、訪れていただいたみなさま、ありがとうございます。

## 個人山行報告

### 安達太良山(2月10日～11日)

参加者 会員(障害者1名、健常者3名)

2月10日

今朝まで降っていた雪も止み、青空が広がってきた。上野駅から各駅停車で3回乗り換え、二本松に向かった。車窓からは、安達太良山のたおやかな峰が望まれた。二本松から乗ったタクシーの運転手さんは、とても楽しい方で、東京の電車の乗り換えなど、とても詳しくかった。帰りに同じタクシー会社の別の運転手さんに聞いたら、1年に何度か舞台を見に行くのだとか。どうりで詳しいわけです。

奥岳のスキー場の脇に付けられた夏道を登っていく。馬車道(たぶん林道のこと)を使わ

ず、トレースのしっかり付いた登山道を登る。用心のためにワカンを持ってきたが、使うことはなかった。高度を稼ぎ登っていくと、下界の風景が広がってくる。さらに登ると、勢至平に飛び出した。正面に箕輪山が望まれた。今回、一緒に来たMさんと同じ名前、Mさんは興味津々だった。山スキーをするには、素晴らしい斜面を持った山だ。さらに行くと、鉄山や安達太良山の山頂も見えてきた。勢至平を過ぎると、登山道は斜面をトラバースするようになる。踏み後は狭く、右側は斜面となっているが、雪が柔らかく、踏み後を踏み外しても、雪に潜るだけで転落することはないので、一部急なところを除いて、全盲のIさんには、ダブルストックで歩いてもらう。

谷間にくろがね小屋が見えてきた。小屋に入ったあと、外に出て、ピッケルを使った滑落停止の練習をした。何十回も練習して体で覚えなければ、とっさの時には止められないが、形だけでも覚えてもらえたかと思う。

温泉に浸かり、恒例のカレーライスをお代わりして、ここまで抜きつ抜かれつして来た、青年と話をしたりして、寝床に付いた。

2月11日

朝食が6時30分だったため、出発は7時30分になった。今日は素晴らしい天気だ。鉄山に朝日が当たってわずかに色づいていた。少し急な斜面を登ると、長く緩やかな登りになる。眩しい朝日が私たちを温めてくれる。純白の雪面には野ウサギが自由奔放に足跡を記している。太陽の両側には、幻日が現れていた。パール状の薄い巻雲があるのだろう。



山腹の純白の雪原を行く

しばらく登ると、背後には蔵王の山々が見えてきた。さらに一つ尾根を越えると、安達太良山の山頂が見えてきた。白一色の雪面をトラバースして、さらに一つ尾根を越え、山頂の直下に到着。那須方面や日光方面、そして和尚山がよく見えた。

少し遅れて着いたMさんとYさんを待って、山頂を往復する。急な部分があるため、慎重を期してアンザイレンして登る。山頂に到着する

と、今まで見えなかった磐梯山が、きれいな三角錐の山容を見せていた。その右手には、飯豊



安達太良山山頂にて

連峰がはっきりと見えている。さすがに真っ白だった。その右手には、西吾妻山から続く吾妻連峰が連なり、箕輪山、鉄山を経て、この安達太良山につながっている。二本松や郡山の盆地は雲海の下だった。その向こうには、阿武隈山地が広がっている。那須連山や上越の山々も見え、360度の大展望だ。ここまで同行した青年と写真を撮って、下山にかかる。山頂付近は、やや岩混じりだ。広い稜線は、吹雪いていたらどちらに進んで良いか迷うところだ。今日は素晴らしい天気だ、迷いようがない。広大な雪面を快適に下り、樹林帯に入って行く。薬師岳の展望台に着くと、安達太良山の白くたおやかな峰が広がっていた。ここからは雲海で、下界は曇っていたらしい。そろそろ疲れが出てきたこと、時間が大分オーバーしていたため、ゴンドラで下ることにした。

無風快晴という最高の天気にも恵まれた二日間でした。ただただ山の神様に感謝です。

#### コースタイム

2/10 奥岳(12:20)...くろがね小屋(15:20)

2/11 くろがね小屋(7:30)...安達太良山  
(9:05-9:55)...薬師岳展望台(11:05)

## 各種連絡事項

### 定期総会のご案内

下記の通り定期総会を予定しています。

1. 日時：5月25日(日) 13時～15時(会場の都合で日程を変更する可能性あり)
2. 場所：東京都世田谷区上馬地区会館(変更の可能性あり)
3. 議題：2007年度事業報告及び決算報告、2008年度事業計画について

詳細は、追ってご連絡いたします。

### リハビリテーション誌に掲載

鉄道身障者協会が発行する「リハビリテーション」という小冊子の3月1日発行のものに「視覚障害者登山の楽しみ」というタイトルで、Tさんが書かれた文章が掲載されました。Tさんが登山を始めた頃のエピソードや、登山の楽しみについて感じていることが書かれていま

す。登山やハイキングの際や、定期総会などに持参しますので、ぜひお読みいただけたらと思います。

また、4月1日発行のものには、会の代表ということで、Aの文章も掲載されます。こちらもお覧ください。

### 定年時代に掲載

毎月第一月曜日の朝日新聞に折り込まれる「定年時代」(千葉版)の4月7日発行のものに、山仲間アルプのことが紹介されます。MさんとAが取材を受けましたので、千葉県にお住

まいの方で、朝日新聞を購読されている方は、ぜひご覧ください。こちらにも、登山や総会に持参しますので、ぜひご覧ください。

### 読売新聞夕刊(OUT!DOOR)に「自然と親しむ子ども山登り教室」の募集案内掲載他

読売新聞の夕刊(月曜版)にある「OUT!DOOR」というコーナーに、「自然と親しむ子ども山登り教室」の参加募集案内が掲載されます。3月初め発行のものに掲載される予定ですので、読売新聞を購読されている方は、ご確認いただけたらと思います。なお、今回の教室は、NPO

法人子どもネットやちよさん、八千代市周辺のボーイスカウトさん、NPO佐倉子どもステーションさん、NPO法人子ども劇場千葉県センターさんからもご協力をいただき、それぞれの会員の方に、募集広告や募集チラシなどを配布していただいています。

## 今後の計画

4月から新しい年度となります。山仲間アルプ設立から5年が経過し、6年目に入ります。4月以降、山仲間アルプを設立して最初の登山だった佐渡島のドンデン山や尾瀬のアヤメ平、

奥秩父の国師ヶ岳、入笠山などを計画しています。また、4月からは、「自然と親しむ子ども山登り教室」も始まります。7月最後の週末に計画している早池峰山は、早めに申し込みを締

め切りますので、できるだけ早くお申し込みください。春から初夏にかけて、多くの山を、ぜ

ひ一緒に楽しみましょう！

## 会員情報

新入会員のお知らせ

12月以降、下記の方が新しく入会されましたので、よろしく申し上げます。(敬称略)

正会員 1名

退会者のお知らせ

12月以降、残念ですが、以下の方が退会されました。

1名

## 編集後記

・理事長のつぶやき

今年度は立教大学コミュニティ福祉学部の学生さん15人に参加していただきましたが、いろんな感想をいただき、ありがたく思っています。障害を持つ人たちや年代の違う多くの人たちと接して、多くのことを感じていただけたのではないかと思います。

ただ楽しんでいただけていないかという意見もあるかも知れませんが、楽しむことはとても大切なことだと思います。障害者の方たちと登山をする団体は、関東でもいくつかあるようですが、なかなか「共に楽しむ」ことができていなくて、サポーターが不足するという状況が多いようです。サポーターの方には、「自分自身が楽しいから、サポートをすることが苦にならない」と感じてもらえることが、いろんな面で良い結果を生むと思っています。

・次回発行予定は、6月です。

そして、これから福祉の現場で活躍する学生さんも多いと思いますが、苦しいこともたくさんあるはず。そんな時、山仲間アルプの登山では、自分もとても楽しめたけど、「それはなぜだったのだろう？」と考えてもらえたら、とてもありがたいことだと思います。

力のある人からない人まで、みんなが楽しむためには、当然リーダーの責任は重要ですが、それだけではなく、一緒に山に登る多くの方の心遣いあって、始めて楽しむことができていると思います。また、黙って受け入れてくれる自然の懐の深さもあります。学生さんたちへの講義では、「表に現れない思いやりに気づくことが大切だ」と話していますが、実践の場を通じて、きっと感じてもらえると思っています。

参加申し込みやお問い合わせは事務局まで  
〒276-0022 千葉県八千代市上高野 1161-1-208

NPO 法人山仲間アルプ事務局 網干 勝

TEL.047-484-8308

障害の有無も、年齢も、男女も関係なく、みんなで山を楽しみたいね。自然は、誰に対しても平等だよ！！

